

令和7年度		昭島市立拝島第二小学校		学校経営重点計画(教育推進計画)年度末評価【総括表】											
学校教育目標		○よく考える子(知) ◎心ゆたかな子(情) ○元気な子(意)(体)	ビジョン	【目指す学校像】 【目指す児童・生徒像】 【目指す教師像】	○「子供の成長」を教育活動の中核に置き、連携・協働する学校　○「チーム」一丸で教育活動を推進する学校 ○自らの人生(運命)を自らの力で切り拓き、これからの社会の創造を担える児童～グローバルに考え、ローカルに実践する子～ ○「チーム拝二」の一員として、自らすすんで学び、高め合い、協働して職務を遂行する教師　○子供のよさや可能性を伸ばせる教師集団										
領域	中期経営目標 (3年間)	短期経営目標 (1年間)	具体的方策	取組指標	評価	成果指標	評価	自己評価結果の分析	学校関係者評価	評価	次年度への改善策				
確かな学力	(知) 自ら学び考え判断し、協働して問題を解決することができる児童の育成	日々の授業を充実させ、全国学力・学習状況調査の平均正答率の引き上げを図る。	「授業改善推進プラン」を基に、児童が自身の学びの成果を実感できるように指導する。	4 8割以上の教職員が、「授業改善推進プラン」に基づく指導を行った。 3 7割以上の教職員が、「授業改善推進プラン」に基づく指導を行った。 2 6割以上の教職員が、「授業改善推進プラン」に基づく指導を行った。 1 6割未満の教職員が、「授業改善推進プラン」に基づく指導を行った。	4	4 学力調査の平均正答率が国比OP 3 学力調査の平均正答率が国比-1P 2 学力調査の平均正答率が国比-2P 1 学力調査の平均正答率が国比-3P	1	「授業改善推進プラン」を基に全教員が授業を実施したが、6年の全国学力・学習状況調査において、本校児童の平均正答率は、国語63%(全国66.8%)、算数56%(全国58%)だった。	C	今年度は国語科の学力に課題があったため、次年度は校内研究で「読解の基礎・基本」について研究を進めていく。また、読書活動の推進にも力を入れ、確かな学力と学習への主体的な態度を育成する。					
			言葉の力で獲得した知識を生かして、自分の思いを論理的に表現できる児童を育成する。	指導計画のPDCAサイクル化を図り、児童が考えを深め、表現する場を意図的・計画的に設定する。		4 8割以上の教職員が、児童が考えを深め表現する場の設定を計画的に行った。 3 7割以上の教職員が、児童が考えを深め表現する場の設定を計画的に行った。 2 6割以上の教職員が、児童が考えを深め表現する場の設定を計画的に行った。 1 6割未満の教職員が、児童が考えを深め表現する場の設定を計画的に行った。		4 「思考・判断・表現」の評価B以上70%以上 3 「思考・判断・表現」の評価B以上60%以上 2 「思考・判断・表現」の評価B以上50%以上 1 「思考・判断・表現」の評価B以上50%未満			4	「授業改善推進プラン」を基に授業を実施する中で、児童が考えを深め、表現する場の設定を行ってきた。朝学習や読書旬間に継続して取り組んできた中で、その成果が表れつつある。	A	次年度も児童が考えを深め、表現する場の設定を、授業の中に意図的に取り入れていく。また、視写や文章表現の学習など、各学年に応じた適切な指導を授業全般を通して実践していく。	
			学んだことを日常生活に生かしたり、自分の周りの社会に役立てたりしようとする児童を育成する。	各教科、特別活動、特別の教科 道徳を中心に、教育活動全体を通して児童が自己分析で課題を設定し、自ら挑戦できる場を設定する。		4 8割以上の教職員が、授業実践における振り返りを行った。 3 7割以上の教職員が、授業実践における振り返りを行った。 2 6割以上の教職員が、授業実践における振り返りを行った。 1 6割未満の教職員が、授業実践における振り返りを行った。		4 授業で学んだことを生活や社会に生かそうとする児童70%以上 3 授業で学んだことを生活や社会に生かそうとする児童60%以上 2 授業で学んだことを生活や社会に生かそうとする児童50%以上 1 授業で学んだことを生活や社会に生かそうとする児童50%未満				4			全教職員が授業後の振り返りや「授業で学んだことを生活に生かす」ことを意図的に指導してきた(91.5%)。成果指標は77.1%であり、昨年度よりも増加している。
		不登校児童を減らし、全ての児童が安心して登校できる学校にする。	①不登校アセスメントの実施 ②「のびのびルーム」の効果的な活用 ③温かい学級づくりによる不登校の未然防止	4 8割以上の教職員が、不登校対策に取り組んだ。 3 7割以上の教職員が、不登校対策に取り組んだ。 2 6割以上の教職員が、不登校対策に取り組んだ。 1 6割未満の教職員が、不登校対策に取り組んだ。	4 不登校の出現回数2割減少 3 不登校の出現回数1割減少 2 不登校の出現回数増減なし 1 不登校の出現回数増加	2	学校いじめ対策委員会、不登校対策委員会を毎月開き、個別の案件に丁寧に検討・対応している。家庭的な問題ですぐに解決に至らない案件が多いが、のびのびルームの活用等で改善も見られている。	B	不登校児童に対してはオンライン授業の実施や「のびのびルーム」の利用などを勧め、継続して、児童と社会のつながりが断たれることのないように全教職員で取り組んでいく。						
			児童の自己有用感、思いやりや協調性、コミュニケーション能力の向上を図る。	①学校行事での実行委員の活躍の場の設定 ②異学年交流の実施 ③学級会の計画的な実施	4 8割以上の教職員が、異学年交流・学級会を行った。 3 7割以上の教職員が、異学年交流・学級会を行った。 2 6割以上の教職員が、異学年交流・学級会を行った。 1 6割未満の教職員が、異学年交流・学級会を行った。		4 自分たちで学級・学校を創っていると感じる児童70%以上 3 自分たちで学級・学校を創っていると感じる児童60%以上 2 自分たちで学級・学校を創っていると感じる児童50%以上 1 自分たちで学級・学校を創っていると感じる児童50%未満			4	学級会や異学年交流に力を入れてきた(95.5%)。児童が課題を見いだし改善する機会を設け、各行事では実行委員会を設置し、児童が中心となって活躍する機会を設けてきた。その成果が表れている。		A	今後も、左記の取組を継続するとともに、行事や学校生活の中で児童が活躍する場を設け、更なる児童中心の学校づくりを進めていく。	
				学校の決まりを守る風土を創り上げる。	学校の決まりの意味・意義を理解させ、守らせる。		4 8割以上の教職員が共通理解をもって、生活指導に取り組んだ。 3 7割以上の教職員が共通理解をもって、生活指導に取り組んだ。 2 6割以上の教職員が共通理解をもって、生活指導に取り組んだ。 1 6割未満の教職員が共通理解をもって、生活指導に取り組んだ。				4 学校のきまりを守っていると回答する児童70%以上 3 学校のきまりを守っていると回答する児童60%以上 2 学校のきまりを守っていると回答する児童50%以上 1 学校のきまりを守っていると回答する児童50%未満	4			年度や学期の初めにおいて全校で統一した「学校のきまり」を児童に指導している。また、問題行動が見られた際においても、教員が共通理解をもって、決まりの意味や意義を児童に説いている。
		日々の授業の充実を基に、体育の授業が好きな児童を増やす。			体育研修を実施し、体育科の授業の充実を図る。体力向上旬間を設定する。	4 8割以上の教職員が、体育研修を活用した指導を行った。 3 7割以上の教職員が、体育研修を活用した指導を行った。 2 6割以上の教職員が、体育研修を活用した指導を行った。 1 6割未満の教職員が、体育研修を活用した指導を行った。	4 運動が好きになったと回答する児童70%以上 3 運動が好きになったと回答する児童60%以上 2 運動が好きになったと回答する児童50%以上 1 運動が好きになったと回答する児童50%未満	4	教員の体育研修を行い、それを活用した体育の授業を行った(90.5%)。少しずつ成果に表れているが(76.1%)、更に運動が好きな児童が増えるよう、取組を充実させていく必要がある。		B				次年度も教員の体育研修を実施し、体育の授業の充実を目指す。体力向上旬間の取組を更に進めていく。
			児童の課題に応じた様々な運動に親しませる場を設定し、運動能力の向上を図る。		体力調査の結果に基づく課題分析・解決策の共通理解と共通実践をする。コーディネーショントレーニングを実施する。	4 8割以上の教職員が、体力向上のための取組を実施した。 3 7割以上の教職員が、体力向上のための取組を実施した。 2 6割以上の教職員が、体力向上のための取組を実施した。 1 6割未満の教職員が、体力向上のための取組を実施した。	4 Tスコアを都平均以上にする。 3 Tスコアを都平均にする。 2 Tスコアを都平均より-1%にとどめる。 1 Tスコアを都平均より-2%にとどめる。		3	体力向上旬間を設定し、コーディネーショントレーニングにも計画的に取り組んだ。しかし、取組指標の結果からまだ改善の余地がある。課題克服のための共通実践を計画し、取り組んでいく必要がある。			B	体力調査の結果による課題分析を基に、課題を克服するための取組を考え、全校で取り組んでいくようにする。体育部を中心に、体力向上の取組を継続させるとともに、更なる工夫改善をしていく。	
				家庭と連携して、児童の基本的な生活習慣の向上を目指す。	「元気アップガイドブック」や「すっきりカード」を計画的に活用し、児童自身が生活改善の大切さを意識し実感できるようにする。	4 8割以上の児童が、「すっきりカード」を計画的に活用した。 3 7割以上の児童が、「すっきりカード」を計画的に活用した。 2 6割以上の児童が、「すっきりカード」を計画的に活用した。 1 6割未満の児童が、「すっきりカード」を計画的に活用した。	4 生活改善を実感する児童70%以上 3 生活改善を実感する児童60%以上 2 生活改善を実感する児童50%以上 1 生活改善を実感する児童50%未満			3		今年度は「元気アップガイドブック」に加え、「すっきりカード」を活用し、児童の生活改善を目指した。生活改善を実感している児童は65.7%と、あと一歩目標に届いていない。継続して取り組んでいく。			
		自ら学び、自ら考える力やより良く課題を解決し、自分の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。			総合的な学習の時間や各教科等の授業において、教科横断的・探究的な学習の充実を図る。	4 8割以上の教職員が、探究的な学習の授業実践に取り組んだ。 3 7割以上の教職員が、探究的な学習の授業実践に取り組んだ。 2 6割以上の教職員が、探究的な学習の授業実践に取り組んだ。 1 6割未満の教職員が、探究的な学習の授業実践に取り組んだ。	4 主体的に学習していると回答する児童70%以上 3 主体的に学習していると回答する児童60%以上 2 主体的に学習していると回答する児童50%以上 1 主体的に学習していると回答する児童50%未満	4			校内研究で「自分の力で未来を切り開く児童の育成」をテーマに、各学年で探究的な学習の授業実践に取り組んだ。主体的に学習していると回答した児童は70.7%で、少しずつ成果が表れてきている。	B			探究的な学習の授業実践が、さらに定着するように、その学習の成果を発表する機会を設けている。その取組を今後も継続し、児童の意欲を高めていく。
			●SDGsの達成のために社会を変革する主体者として、家庭生活から変えていこうとする態度を育てる。 ●地域人材を活用し、人との関わりの中で学ぶ機会を充実させる。		●SDGsの達成のために、家庭生活を実際に改善しようと行動に移すことができる児童を育成する。 ●地域人材を活用した体験活動を実施し、社会貢献しようとする児童を育成する。	4 8割以上の教職員が、地域人材を活用した体験活動を実施した。 3 7割以上の教職員が、地域人材を活用した体験活動を実施した。 2 6割以上の教職員が、地域人材を活用した体験活動を実施した。 1 6割未満の教職員が、地域人材を活用した体験活動を実施した。	4 社会貢献しようとする児童70%以上 3 社会貢献しようとする児童60%以上 2 社会貢献しようとする児童50%以上 1 社会貢献しようとする児童50%未満		3		地域人材を活用した体験活動は、昨年度に比べ増えた。「社会貢献しようと考えている」と答えた児童は71.7%だった。実践に結び付くよう、更に様々な体験活動を実施していく。		4	社会貢献・奉仕活動は自らの心の成長にも寄与するもの引き続き取り組んでいきたい。児童の意識は高まっているので、体験や活動によって、定着化を進めてほしい。6年生の職場体験を復活させてみては。	
				体験活動を充実させ、社会の多様な課題への関心・意欲を高める。	昭島市版「キャリアアルバム」を活用して、児童が自らの将来に、夢をもてるように指導する。	4 8割以上の教職員が、キャリアアルバムを活用した指導を行った。 3 7割以上の教職員が、キャリアアルバムを活用した指導を行った。 2 6割以上の教職員が、キャリアアルバムを活用した指導を行った。 1 6割未満の教職員が、キャリアアルバムを活用した指導を行った。	4 将来への夢や希望がもてたと実感できる児童70%以上 3 将来への夢や希望がもてたと実感できる児童60%以上 2 将来への夢や希望がもてたと回答する児童50%以上 1 将来への夢や希望がもてたと回答する児童50%未満			4	「キャリアアルバム」の活用は行ったが、成果指標において、「将来への夢や希望がもてた」と答える児童の割合は72.9%だった。引き続きキャリア教育や学校行事などの充実を図っていく必要がある。			4	

